

林羅山に於ける白居易

—序論—

林羅山、江戸初期の儒学者、朱子学の祖として著名な人物であることは今更説くまでもないが、やはり最初にその略歴について記しておくことにしたい。

天正十一年（一五八三）、京都に生まれ、明暦三年（一六五七）の江戸の大火によって蔵書稿本等の焼失により精神的打撃を受け、数日後の正月二十三日に没した。享年七十五歳。墓地はかつての昌平黌の在野地上野忍岡にあったが、現在は東京新宿区の市谷山伏町に移転している。

幼名は菊松麻呂、名は忠、一名信勝、字は子信。剃髪して後の法号を道春という。号は羅山、別号を羅浮山、浮山、夕顔庵、梅花村、瓢菴など、通称を又三郎という。祖先は加賀藩士で、祖父は正勝、父は信時といい、子に驚峯、読耕齋がいる。

父の兄吉勝の養子となり、文禄四年（一五九五）、十三歳で元服、建仁寺に入って読書に励んだ。慶長二年（一五九七）、十五歳の時に出家を勧められたが仏教に対して痛烈な非難をし、家に帰って独学の道を進む。

学問の基本は經学、經学の真髄は朱子学とし、以後經書の講説、經書の加点を始める。慶長八年（一六〇三）、二十一歳で、朱子の『論語集註』の講説、四書の加点を行った。慶長九年（一六〇四）、二十二歳の時、江戸儒学の祖、藤原惺窩に人を介して書簡を送り、經義論

林羅山に於ける白居易

西村 富美子

争の後に会見が実現して師弟関係を結び強い影響を受けた。惺窩四十歳の時のことであった。門下には、羅山の他に松永尺五・那波活所・石川丈山などが輩出している。

慶長十年（一六〇五）、二十三歳で師藤原惺窩等の尽力を得て、二条城で家康に謁見、慶長十二年（一六〇七）、二十四歳の時、駿府に行き、剃髪を命ぜられ道春と号した。寛永六年（一六二九）、四十七歳で法印に叙せられ、翌寛永七年（一六三〇）に、上野忍岡に学寮（後の昌平黌）を建てた。

徳川幕府に家康・秀忠・家光・家綱の四代にわたって仕え、学制礼制等を定めたが、特に家光の時代に羅山の地位は確固たるものになり、次々と著作の執筆を行った。先に述べたように、日本朱子学の祖、また林家の学を江戸幕府の官学として定着させ、同時に儒学全盛の基礎を築き、その功績は偉大であり他の追隨を許さぬものがある。

その著作は、師の藤原惺窩には及ばないが極めて広範囲にわたり、經学以外のものも多い。神・佛・耶蘇関係、また「孫子」、「徒然草」関係等の注釈書など、枚挙に遑がなく、殆どが現在内閣文庫（国立公文書館）に収蔵されている。

羅山は、中国という経以外に、史・子・集の分野の関係の著作も残している。こうした著作を通して見るに、その読書の範囲は実に広く、思想関係では、經学以外に老莊、仏教、史書では史記・漢書等、文学

林羅山に於ける白居易

関係では、『楚辞』・『文選』・『三体詩』・『古文真宝』や、個人の別集類、唐では李白・杜甫・韓愈・柳宗元また白居易、宋では蘇東坡・黄山谷などを読破していたことを『羅山文集』によっても知ることができ

る。これらの多種にわたる羅山の著作の中に、白居易の「長恨歌」及び「琵琶行」に関する注釈書の含まれていることが、筆者に意外な思いの興味を抱かせた。中国でも異質の文学としてあまり正当に評価されて来なかった白居易のこの作品を、経学者林羅山が取りあげ注釈を施すというのは、いささか奇異というかミスマッチの印象を免れなかった。

その注釈書は『歌行露雪』という。典拠その他を中国に求めて書かれた中国の注釈書である。漢文また漢文訓読体による「長恨歌」「琵琶行」の注釈書は珍しい。これが『歌行露雪』の特色であり、同時に羅山の執筆の意図でもあると考えられる。

この小論においては、本題の『歌行露雪』を紹介する前に、林羅山の「長恨歌」「琵琶行」、また白居易に関する論究について紹介し、『歌行露雪』の序論として述べておくことにしたい。

○

白居易に関していえば、羅山には先に挙げた『歌行露雪』以外の著作としては、『長恨歌私考』がある。また『林羅山先生集』百五十巻のうち、「文集」七十五巻から白居易に関して羅山が言及しているものが幾つかある。

次に、これらの内容について述べ、羅山の白居易に対する見解を考察し、本論への発端とすることにしよう。

一、『長恨歌私考』（羅浮道春涉獵抄）は、執筆年代は不詳、江戸初期のものか。その内容は「長恨歌」に登場、また関与する人物の歴史的资料を網羅し、それらの史書のほとんど全文を忠実に挙げている。

◎唐書列傳四十四

◎歐陽（修）唐書本紀第五

①

②

◎唐書本紀第六

◎唐書宗室列傳六

◎唐書后妃列傳一

◎楊国忠

◎高力士

◎安禄山

以上、羅山の挙げた史書の出所（原典）を記せば、

①『新唐書』卷百十九・列傳第四十四・白居易伝

②『新唐書』卷五・本紀第五・玄宗皇帝

③『新唐書』卷六・本紀第六・肅宗皇帝

（安禄山・安慶緒・史思明）

④『新唐書』卷八十一・列傳第六・三宗諸子

（睿宗六子・睿宗十一女・玄宗三十子・玄宗二十九女）

⑤『新唐書』卷七十六・列傳一・后妃上・楊貴妃

（※序の一部及び「楊貴妃」伝を載せる）

⑥『新唐書』卷二百六・列傳第三百一・外戚・楊国忠

⑦『新唐書』卷二百七・列傳第三百二・宦者上・高力士

⑧『新唐書』卷二百二十五上・列傳第五百十上・逆臣上・安禄山

以上のように、白居易・玄宗・肅宗・睿宗及び玄宗の皇子・公主・楊貴妃・楊国忠・高力士・安禄山・安慶緒・史思明など、すべて「長恨歌」と何らかの関係のある人物の「伝記」であり、「長恨歌」の歴

史的背景の立証の意味がある。この『長恨歌私考』は、『歌行露雪』より後に書かれたものであり、江戸初期元和年間に、那波道圓持参の

『白氏文集』を読んでいたので、あるいはこのころに執筆されたもの

かも知れない。

二、次に、『林羅山文集』のなかで、白居易に関係のあることがら

に言及しているものを順に挙げ、羅山の白居易観を考えてみることに

したい。まず白居易に関連ある「文」の項目を挙げると、題跋が三、

記事が四項ほどある。なお『林羅山文集』は羅山の三男、林鷲峯、名は恕により編輯されたものであり、初めに「寛文元年孟秋朔旦、不肖孤恕謹序」の序がある。先にそれらの文の巻数・条数を示しておく。

卷五十四・題跋四

○白氏文集跋 ①

○題琵琶行後 ②

○題長恨歌後 ③

卷六十九・随筆五

○五条 ④

○六条 ⑤

卷七十三・随筆九

○三十四条 ⑥

卷七十四・随筆十

○三十六条 ⑦

(○の数字は筆者が便宜上付したものである)

これらを、内容から、一・白氏文集関係①・⑥・⑦。二・長恨歌関係③・⑥。三・琵琶行関係②。四・白居易論④・⑥。五・作品論④・⑤・⑥。に分け、順次述べていくことにする。

一・白氏文集関係

① 白氏文集の跋(卷五十四)

一二巻の尾 元和四年、戊午、初秋。那波道圓、洛自り東武に來り、新刻白氏文集一本を齎して我に寄す。我れ公務の暇、見るに隨い、朱を以て句讀を爲す。滴露の筆を今日に起こすと云う。時に二十又た一日なり。羅浮子・林氏・子信、江城夕顔巻中の麝眠亭に書す。

三の五巻の尾 戊午、秋七月日、道春硃を傳けて句讀を加う。

林羅山に於ける白居易

六の八巻の尾 戊午、七月下旬、道春見るに隨いて之れを硃す。

九の十一巻の尾 戊午、孟秋、念後日、羅浮・林某、一考。

十二の三巻の尾 戊午、道春朱を附く。

十四の五巻の尾 戊午、孟秋、道春朱を塗る。

十六の七巻の尾 戊午、七月日、羅山散人之れを一考す。

十八の九巻の尾 戊午、夷則下旬、朱句を加う。

二十の一卷の尾 戊午、七月日、二木氏、朱墨を塗る。

二十二の四巻の尾 戊午、七月二十六日の夜、朱を附けたる。

二十五の七巻の尾 戊午、七月日、林氏、勝名、子信字、蠟燭の下に於いて、丹砂以て塗る。

二十八の三十巻の尾 戊午、七月日、道春子、硃以て之れを點す。

三十一の三巻の尾 戊午、八月日、硃點を傳けたる。

三十四の五巻の尾 戊午、八月日、朱を塗りました。

三十六の七巻の尾 戊午、仲秋、朱句を附く。

三十八の九巻の尾 戊午、八月、林道春、朱句を加う。

四十の一卷の尾 戊午、八月月上旬、羅浮山人・道春、朱を塗る。

四十二の四巻の尾 戊午、八月、林道春。

四十五の四巻の尾 戊午、八月日、道春一校。

四十七の八巻の尾 戊午、八月日、羅浮山人、一校したる。

四十九の五十巻の尾 戊午、八月月上旬、朱を附けたる。

五十一の二巻の尾 戊午、仲秋月上旬、道春、東武麝眠亭の下に電

觸す。

五十三の四巻の尾 戊午、八月日、二木子、之れを考う。

五十五の六巻の尾 戊午の年、道春子、朱を加う。

五十七の八巻の尾 戊午、秋八月日、硃を附けたる。

五十九の六十巻の尾 戊午、八月月上旬、朱を加う。

六十一の二巻の尾 戊午、八月上旬、朱句を附けたる。

六十三の五巻の尾 戊午、秋、道春、朱を塗る。

林羅山に於ける白居易

六十六の八巻の尾 戊午、南呂上浣、丹を夕顔巻に附く。

六十九の七十一巻の尾 香山文集一本合部七十一巻・三十冊、道圓我に寄す。我嘗て一通を繕寫し家に藏むと雖も、今又た此の新本を得て、喜氣津津、一に贅爾毎に手に任せて朱を塗る。暮鴉の窓を過ぎるが如し。一日一兩冊、或いは夜を連ねて四三冊に至る。以て箱中に藏めて、子孫に附す可きのみ。元和四年、八月八日、夜雨燈を吹きて之れを記す。駿府の御書庫預かり・前の侍讀林道春子信。

右、白氏文集毎冊尾の記する所、字の多少を嫌わず悉く之れを載す。先生少年より老大に至るまで、讀書敏捷、毎每此の如し、准じて之れを知る可し。

この跋文によれば、元和四年（二六一八）秋七月二十一日、那波道圓が京都から江戸にやって来て、新刻の『白氏文集』を自分のところに持参した。公務の合間に朱で句読点を付け始めた。（夕顔庵・麝眠亭において）という。終わったのは八月八日、十八日間で『白氏文集』七十一巻に朱の句読点を付け終わっている。那波道圓が羅山に寄せたのは、『白氏文集』七十一巻、三十冊本であった。以前に書写した一本を蔵していたが、道圓から新本を得て、喜々として、連日連夜一二冊あるいは三四冊、朱点を付け箱に蔵し、子孫に残すのだ、と羅山は記している。読書のスピードの速さは少年時代からのようであった。この跋文によれば、羅山の手元には二本あり、自身の書写本及び所謂世にいう那波本の二種である。

⑥（巻七十三・隨筆九・第三十四条の前半部）

日本舊時の博士秀才、皆な白氏文集を誦す。故に其の語句多く之れを引く。且つ倭歌を詠ずる者も亦た其の趣を用う。云えること有り、白氏第一第二の帙、常に握玩す可し。就中、秦中吟・新樂

府・長恨歌・琵琶行の類、人人之れを暗誦す。然ると雖も、之れを李・杜・韓・柳に比すれば、大いに徑庭有り。東坡之れを俗と謂う、宜なるかな。然ると雖も、その間閑適有り、洒落有り、真率有り、足ることを知るの樂しみ有り、罪を懼るの戒有り、廢す可からざるなり。

この条は『白氏文集』論と白居易論とが混在している。日本の旧時というのは、主として「文は文集、文選」といわれた平安時代のことを指すのであろう。したがって白氏文集からの引用が多く、和歌詠みでさえその趣旨を用いた。白詩がすべての基準であった。『白氏文集』の「第一帙・第二帙（巻一から巻二十まで）」は、常に把握賞翫すべきであると言われ、とりわけ秦中吟十篇・新樂府五十篇・長恨歌・琵琶行の類は、人々は暗誦していた、という。この「第一・二帙」は、白居易が初めて編集した「十五巻、八百首」、元和十年、四十四歳の時江州司馬時代の詩集を重要視したものではないだろうか。「秦中吟」以下四つの作品がすべて含まれている。

白居易の作品について、羅山は、李白・杜甫・韓愈・柳宗元に比較すると、大差がある。蘇軾は白居易を「俗」と言ったがもっともなことである。が、詩には、閑適・洒落・真率の情、知足の樂しみ、罪にたいする戒懼等々があり、廢除することはできない、と主張する。

白居易に対する絶対的信仰への批判、作品は李・杜・韓・柳には劣るとの評価、蘇軾の「白俗」の言は正しい、とその見方は嚴しい。しかし閑適・洒落・真率・知足・戒懼などの利点があるとし、白居易に對して実に適正かつ説得性のある評価を下している。

⑦（巻七十四・隨筆十・第三十六条）

白氏長慶集五十巻、五帙と爲す。帙毎に十巻、其の後長慶以後の詩文を増して、白氏文集と號す。共に七十巻、十帙と爲す。帙毎に七巻、帙は帙と同じ、書衣なり。劉孝綽、梁の昭明太子の集の

序を作りて云う、編次十巻を一帙と爲すと。然らば則ち樂天文集の帙も亦た昭明に效うか。

長慶年間に編集された『白氏長慶集』五十巻は、五帙、一帙十巻。長慶以後の詩文を増して『白氏文集』と称し、全部で七十巻、十帙とし、一帙ごとに七巻である。劉孝綽は梁の『昭明太子集』の序に、十巻を編次し一帙とした、と言う。白樂天の『文集』の帙も『昭明太子集』に倣ったものであろうか、と羅山は説いているのだが、いささか意味不明の点があり誤字脱文があるのではなからうか。一帙に十巻というのではなく、計何帙の数に主点があるのだらうか。『昭明太子集』に準じたものだとの見解を示したものと思える。『白氏文集』の内容に関する記述ではないが、『文集』の外見のまとまりにも関心を寄せたのであろう。

二・長恨歌関係

③長恨歌の後に題す(卷五十四・題跋四)

開元二十一年、貴妃年十五、壽王の妃と爲る。天寶四載、冊して貴妃と爲る。時に年二十七なり。十五載、妃を馬鬼に縊り殺す。時に三十八、開元七年、妃生れて、天寶十五載に死す。竊に以うに、貴妃姓は楊、名は太真、蜀人。舉止閑冶、漢の武帝の李夫人が如し。臨邛道士亦た姓は楊にして蜀人。鍛鍊修行、漢の武帝の李少君に似たり。是を以て此れを按ずるときは、則ち道士は貴妃爲り、貴妃は道士たり。烏乎、學者能く當に之れを思ふべし。世傳う、貴妃蓬萊に在り。蓬萊は日本に在り。然れば則ち、楊妃日本よりして大唐に化す。之れを信ぜんや、異なるかな。

慶長元年丙申の冬、時に先生十四歳

この題跋が何から収録されたものか不明である。というのは、次に挙げる「琵琶行」の題・跋は「歌行露雪」の「琵琶行」の最終部に記

林羅山に於ける白居易

されているものを収録したものと思われるのに対して、「長恨歌」にはそれに相当するものが見当たらないのである。

それにほぼ相当するのは、「長恨歌」(『歌行露雪』)の第五・六句「天生の麗質自ら棄て難し、一朝選ばれて君王の側に在り」に付せられた注及び上部欄外に記された頭注、また「臨邛の道士鴻都の客」の注(解説)、さらに「昭陽殿裏恩愛絶え、蓬萊宮中日月長し」の注(解説)等であるが、現段階では不可解としか言いようがない。

「長恨歌の後に題す」が、こうした三つの林羅山の説を総合したのか、或いは「琵琶行」と同じく独立した「題」が存在したのか、どちらであるのか明らかではない。要するに、林恕の編集した『羅山文集』には、「長恨歌の後に題す」が収録されているが、『歌行露雪』の「長恨歌」には「題」の文は見えない、ということである。

ちなみに、三箇所に見える、羅山の注(解説)を次に挙げておくことにしたい。(文中の□は、判読できない字)

●「天生の麗質自ら棄て難く、一朝選ばれて君王の側に在り」の頭注。

道春□云う、開元二十一年、妃□□□□□□□□。天寶四載、冊して貴妃と爲す。時に年廿七。十五載、妃を馬鬼に于いて縊殺す。時廿八。開元七年、妃生れて天寶十五載に死す。

●「臨邛の道士鴻都の客、能く精神を以て魂魄を致す」の注。

予竊に以んみれば、貴妃姓は楊、名は太真、蜀の人。舉止閑冶なること、漢の武帝の李夫人の如し。道士亦た姓は楊にして、蜀人なり。鍛鍊修行、漢の武帝の李少君に似たり。是を以て此を按ずるときは、則ち道士は貴妃爲り。貴妃は道士爲り。ああ、學者能く當に之れを思ふべし。

●「昭陽殿裏恩愛絶え、蓬萊宮中日月長し」の注。

予謂えり、貴妃蓬萊に在り、蓬萊は日本に在り。然れば則ち、妃子は日本人か、世々伝う、楊妃日本よりして、大唐に化すと。信

林羅山に於ける白居易

なるかな。異なるかな。

この三つは、いずれも「道春□云うに」、「予竊に以んみれば」、「予謂えり」など、羅山の説であることが明瞭な部分であり、この三つを合わせて「題」としたのかも知れないとも考えられる。ただし「琵琶行」は、『歌行露雪』の「琵琶行」の最後に独立のものとして載せられているので、両者の相違については検討の余地が残されている。さらに「琵琶行」の場合は、首尾一貫した内容であるのに対して、「長恨歌」の「題」の方はそうではなく、『楊貴妃』のことで統一はされているものの不自然さを感じさせるものがあることは否定できない。

が、この題・跋が慶長元年（一五九六）冬、羅山十四歳の時に記されたというのは、重要なことである。

次に、先に一、「白氏文集」関係のところで挙げた「卷七十三の後半部」に、「長恨歌」の楊貴妃に関するものがある。

⑥（卷七十三・随筆九・第三十四条の後半部）

頃、陶南村が説郭を閲るに、楊妃傳を載す。末に術士あり。玄宗の妃を念いて迷うを見て、乃ち詐りて妃像を造り、夜玄宗をして密かに之を窺わしむ、眞の如し。玄宗愈いよ惑眩す。又た唐詩解を見るに、長恨歌に云えること有り、花の細地に委せて人の收むる無し。蓋し當時馬嵬に絞りし時、人の其の細を拾う者有り。道士之れを得て、以て妃に仙島に逢うの信と爲す。帝の昏迷甚だし。楊妃の機已に世上に出ずるときは、則ち細釵搔頭の類、幻士の手に入るに必せり。漢の李少君が術も亦た以て観る可きや。

この内容は二つに分かれており、明初の陶宋儀の『説郭』の楊妃伝及び「唐詩解」に見えるものである。羅山が見た『説郭』は、通行本の『説郭』とは異なるものと思われる。通行本の『説郭』では、終わりに近いところに道士楊通幽が登場し、玄宗が楊貴妃を念うのを知って、李少君の術ありと言ひ、方士が其の術を尽くして貴妃を搜索に行

く、とあり、羅山のいう「妃像を造り云々」の話は無い。ただし、通行本では、玄宗が画工に命じて貴妃の形を別殿に描かせ、朝夕それを視てすすり泣きをしていた、と述べており、『説郭』の版本が問題である。

「唐詩解」は、明の唐汝詢の『唐詩解』のことか。未見だが、別に『説郭』には貴妃が殺されたとき、馬嵬に住む女が貴妃の錦の襪の片方を手に入れて、通りがかりの旅人に次々と見せ、一回につき百銭の見料をとり、そのうち数えきれないほどの銭を稼いだ、という話が見える。

「長恨歌」にまつわる伝説は、中国にも日本にも無数に伝えられており、それだけ話題性に富む作品だということになるろう。

三、琵琶行関係

「琵琶行」に関するものは、『羅山文集』の中に一つ見えるが、前の「長恨歌」の所で触れたように、『歌行露雪』の「琵琶行」の最後に付せられているのと全く同じものである。

②琵琶行の後に題す（卷五十四・題跋四）

太史公、衛青・霍去病が傳及び李廣が傳、唯だ將軍・驃騎將軍と曰いて、傳の末に至りて、將軍青・驃騎將軍去病と曰う。又た歐陽永叔醉翁亭の記、唯だ太守と曰う。記の末に至りて、廬陵の歐陽脩と曰う。今又た琵琶行、唯だ主人と曰ひ、又た我と曰ひて、行の末に至りて、江州司馬と曰う。皆な文法なり。

人称代名詞の問題に言及したもので、『史記』の衛青・霍去病の兩將軍、歐陽脩の「醉翁亭記」、「琵琶行」の三つを取りあげ、文章作成の修辭法であるという。

『史記』卷百十一・列伝第五十一に、衛青・霍去病の伝がある。しかし兩將軍に対する呼称は一定していない。羅山の言うように、文末

のみに固有名詞を付してはおらず、文の途中にも將軍青・驃騎將軍去病を用いている。歐陽脩の「醉翁亭記」には、「之れに名づくる者は誰ぞ、太守自ら謂うなり」をはじめとして、「太守」が頻出し、最後に「太守とは誰を謂う、廬陵の歐陽脩なり」とある。白居易の「琵琶行」の「主人は馬より下り客は船に在り」の主人、「我琵琶を聞きて已に歎息し」及び「我去年帝京を辞して従り」の我、最後の「江州司馬青衫湿う」の江州司馬、は羅山の言うとおりで、「醉翁亭記」と「琵琶行」の記述から推測すると、作品の中の自称の用法には、あるルールがあつて、最後にフルネームを使うのが「文の法」だという主旨のようである。

四、白居易論

④（卷六十九・隨筆五・第五條）⑥については前述）

白居易、始めて唐帝に見えて、治を爲し政を爲すの心有り。而れども小人位に在り、其の讒に遭ひ罪に罹らんことを恐れ、漸く爲るに勇むの志無し。唯だ事に觸詠に従ひ、風月に留連し、自ら醉吟先生の傳を撰す。晩に廬山に入りて浮屠と相遊び、以て其の説を好す。彼の向に、所謂樂府・兩朱閣、人家悉く寺と爲らんことを恐るること、何くに在るや。

白居易の政治に対する心情の変化を述べ、晩年の仏教への傾倒と、三十代の青年期に作った諷諭の詩、新樂府五十篇の「兩朱閣」の主旨との自己矛盾について言及している。ただし、「晩に廬山に入りて浮屠と相遊び」は羅山の思い違いであり、晩年というか五十代後半からは洛陽に住んでおり、香山寺の僧侶と親交を結んでいた。廬山は、四十代半ばに、江州司馬として左遷されていた時に草堂を造り、周辺の寺の僧侶と交遊した所である。勿論仏教への関心はこのころから急激に強くなっていったことは申すまでもない。

林羅山に於ける白居易

三十五歳で官吏の最終の試験に合格して以来、左拾遺・翰林学士等を歴任した四十歳までが、青年官吏白居易が最も活躍し政治参加への純粹また積極的参加の意欲に燃えていた時期であった。が、四十歳の時に母の死による喪に服して三年後、政界に復帰した白居易の立場は急転直下し、真摯率直な諫言が官職外の越権行為の上申とされ、讒言により江州司馬への左遷となる。忠州を経て都長安へ復帰したのは、五十歳のころであつた。中央政界での十年の空白は、致命的であり、所謂牛・李また二李の党争、宦官との複雑な政争の中で、白居易の政治への関心は急速に冷えていき、洛陽の履道里での吏隱の生活を望むようになった。「醉吟先生伝」は、六十七歳の時に、洛陽で陶淵明の「五柳先生伝」に倣つて作られたものである。中に「自ら觸詠の興、猶お未だ衰えず」や、風月に詩興を抱くことが述べられており、羅山もこの点は評価しているように思える。しかし仏教については、羅山は先のように批判的である。「兩朱閣」は仏寺が次第に多くなつていくのを諷刺した詩で、徳宗の二人の公主の歿後、民家を没収して建てられたかつての大邸宅が寺に変わり、世の中寺ばかりになるのではと危惧し、詩の最後に「漸く恐る、人間尽く寺と爲るを」と詠っている。長安に寺が増加するのを批判する「兩朱閣」の詩と、白居易自身の後年の仏教への姿勢との矛盾を突いている。

五、作品論（④・⑥については前述）

⑤（卷六十九・隨筆五・第六條）

樂天が母、井に落ちて死す。是に於いて、新井の篇を作る。是に坐せられて、外に徙さる。此の篇集中に載せず。又た唐文粹・文苑英華も亦た収めず。

このことは、『旧唐書』・『新唐書』の白居易の伝に見えるが、ここに述べるように「新井」の詩は、詩集には収められていない。先の江

州司馬左遷に関する罪状とされた、越権行為に、この詩が追い打ちをかける形で、「新井」の詩のほかに「賞花」の詩も合わせて非難の材料とされた。「白居易の母は、花を見て井戸に墮ちて死んだ」のに、この二篇の詩を作っているのは、子としての道をそこなうものだ（『旧唐書』）、と平生から彼に敵意を抱いている者から理由無き攻撃を受けたのである。羅山のいう讒言である。この二篇の詩が今伝わらず、何時の作なのかも分からないので解明の法は無いまだが、羅山は『文苑英華』『唐文粹』（北宋初期編纂）などにも収録されていないことを指摘している。

○ 次稿で述べる『歌行露雪』の中で、この稿に於いては「長恨歌」の跋文のみを挙げておきたい。この跋文は、先に二の「長恨歌」関係の所で挙げた羅山の「長恨歌に題す」とは異なるもので、跋文を書いたのは英甫永雄という人物である。永雄の自筆である。跋文を紹介する前に、なぜ羅山の『歌行露雪』の跋文を永雄が自ら書いたのかを知るために、永雄について簡単に述べておくことにする。

英甫永雄はその名からも分かるように僧侶である。別号を武牢また芳州と言い、狂歌の作者としても知られている。建仁寺の長老であったので通称を雄長老という。室町・天分十五年（一五四六）に生まれ、安土桃山時代の慶長七年（一六〇二）に没している。享年五十六歳。父武田信重は、建仁寺十如院で僧籍に入り、詩作に秀れていた。母宮川尼は清原宣賢の孫、歌人として名がある。若狭で生まれ、建仁寺十如院の僧侶となり、天正十四年（一五八六）四十歳で、建仁寺の住持となった。途中文禄三年（一五九四）四十八歳の時、南禅寺に出住したが、慶長七年に亡くなるまで建仁寺の住持を重ねた。狂歌集『雄長老詠百首』、漢詩文集『倒桐集』がある。中院通勝、母方の叔父細川幽斎と雅交があり、漢詩や狂歌などの作品を残している。

『歌行露雪』の跋文には、「文禄第五仲冬日 前の南禅永雄」と署

されているので、文禄三年南禅寺に一時出ていたのが、再び建仁寺に戻ったころのことと考えられる。また羅山は、初めに述べたように文禄四年、学問に励むため十三歳の時に建仁寺に入ったので、文禄五年は羅山十四歳であった。

次に、永雄自筆の『歌行露雪』の跋文を挙げる。

京師の侘が門下の家に少年有り。其の名を又三郎と謂う。去歳の春、十有三歳にして吾の東山に入り、大洗庵の裡に遊ぶ。先に孔丘の志を学ぶこと二歳、今茲冬の仲、又た君一書を袖にして来たり、以て予に示さる。予開きて之れを管窺するに、長恨歌の露抄なり。予問いて云う、是れ何人の抄する所なるか。又た君答えて曰く、去秋和尚の講席に入りて自ら之れを聴く。尔来此れに本ずく、以て書を出だす。予熟視するに、明皇に面うが如し。樂しみ盡き、哀しみ来るの起本、玉妃の生前没後の事跡、禄兒の反相、方士の幻術、各おの加うる所の文字無し。反切の例・義意・深密の理、悉く筆端に現われ、鼓舞する者、妙中妙を得、奇外奇を呈する者なり。而して今君の抄する所の事歴等、皆是より先に予の録する所の謬説に非ず。寔に後世畏る可き者なり。其れ斯の□か。昔堯夫十四歳にして明妃の引を作ると今又た君十四歳にして玉妃の傳を抄するとは、異曲同工と謂う可し。戯れに唐律一篇を賦して、以て褒むと云う。 □乞 笑擲

年少の揮毫 馬鬼を憐れみ

露抄 雪纂 最も奇なるかな

羨看 子学びて侘力を作すを

長恨 吾 徒だ 此の才を□

文禄第五、仲冬日 前の南禅の永雄

この跋文の大意を述べると、次のようになろうか。
門下の家に一人の少年、名を又三郎というのがいて、去年の春つま

り文禄四年春に、十三歳で建仁寺に入り、塔頭大洗庵に遊学した。二年間儒学を学び、今年の仲冬十一月に、一冊の書を懐に持って来て私に見せた。私はそれを開いてちよっと覗いてみると、長恨歌の書き物であった。私が、誰が書いたものか、とたずねると去年の秋講義の席に連なって聴講したものだと言った。よく読んでみると、まるで玄宗に向き合っているようであった。歓楽が尽き悲哀が起ったものと、楊貴妃の生前歿後の出来事、安禄山の叛乱の様子、仙界に楊貴妃を捜し求めた方士の術、手を加える所は無かった。字音の反切、意義、緻密な理、すべてが筆の端々に出ており、絶妙、奇想外のできばえである。書かれた事歴、私が録したような謬説などではなく、後世恐るべき者である。昔堯夫は十四歳で「明妃引」を作ったが、君もまた十四歳で楊貴妃の伝を書いたのは、異曲同工といふべきだ。戯れに唐詩一篇を作り褒めたたえる。

(詩の意) 少年の筆は、楊貴妃の死んだ馬鬼の地を憐れみ、この書はすばらしいできばえである。君が学問に励んでこのような力量を発揮したのを羨ましく思う。長恨歌、私にはこの才能はとても無い。

文禄五年、十一月、前の南禅寺の住持英甫永雄

と大体の意味はこのようである。この内容は、羅山の経歴と合致しており、建仁寺の住持英甫永雄に『歌行露雪』を見せたのである。時に、永雄五十歳、羅山十四歳であった。この数年後に永雄は亡くなっている。

この羅山十四歳の時の著である『歌行露雪』は、仏教界に於いて建仁寺の長老と呼ばれ、漢詩文や狂歌の作者としてもすでに名を成していた晩年の永雄を感嘆させる内容であり高く評価されたのである。

○

本稿は、林羅山の『歌行露雪』を論ずる前提として、羅山の『歌行露雪』以外の白居易関係の著作、及び『羅山全集』の中から白居易に言及したものを取りあげて、羅山の「長恨歌」「琵琶行」さらには白

林羅山に於ける白居易

居易觀へのアプローチを試みたものである。

(注)

(1) 『改訂内閣文庫漢籍目録』には、次のように見える。

長恨歌私考 (羅浮道春涉獵抄) [林信勝] (羅山) (江戸初)

寫(自筆等)

歌行露雪 (英甫永雄手跋本) (稿本) 林信勝 [室町末]

寫(自筆等)

(2) 羅山が『長恨歌私考』を執筆したときには、手元に二種類の『白氏文集』があったと思われる。すなわち、元和四年に句読点を付した「那波本」と、それ以前に自ら書写した『白氏文集』である。

(3) 一説には、「賞花」の詩は毎年詠んでおり、「新井」の詩は白居易が長安郊外の藍屋島の尉であったときのもので、母の死の二年前の作であったと伝えられる。(陳振孫の『白文公年譜』に引用されている高彦休の「闕史」)

(本学教授)